

(抄録)

研究課題名：不登校経験者に対する「からだ」の授業のみえる化：客観的指標と主観的指標を基に

研究代表者名：鹿野晶子

【目的】本研究の目的は、不登校経験者に対する「からだ」の授業を“みえる化”していく第1段階の作業として、「からだ」の授業を通して子どもたち自身がどのような認識を獲得しているのかとともに、各学習内容の特性を明らかにすることとした。【方法】対象は、A 高等学校の不登校経験者クラスの1年生 56名であった。本研究では、2020年度の3学期に実施された「からだ」の授業の学習ノートに記述された「印象に残ったことや感じたこと」を分析対象とした。分析では、野井（2004）の認識項目を用いて、富川ら（2005）の方法で「印象に残ったことや感じたこと」の各記述を分類、集計し、さらに分類した記述における学習内容間の分布の偏りの有無を $\chi^2$ 検定により検討した。【結果および考察】「印象に残ったことや感じたこと」の各記述を分類、集計した結果、「その他」（24.8%）が最も多く、次いで「からだの事実・法則・ねうちの認識」（23.3%）、「からだづくりに関する感情の認識」（13.0%）、「運動の技能・技術の認識」（11.8%）、「からだづくりの目的・方法の認識」（10.3%）、「運動に関する感情の認識」（8.6%）、「仲間との人間関係に関する認識」（4.9%）、「ルールに関する認識」（3.2%）、「生活の認識」（0.3%）と続き、「生命尊重に対する認識」、「集団（国民）の健康に対する認識」、「身体的・文化的な権利の認識」は確認されなかった。また、各学習内容で子どもたちが獲得した認識には有意な分布の偏りが認められた。以上の結果から、「からだ」の授業は、不登校を経験した子どもにとって自然が大きな刺激となり、身体感覚を研ぎ澄ます機会になっていることが推察された。また、「運動の技能・技術の認識」の獲得に際してからだの変化を伴うケースが多いこと、「からだ」の授業は子どもたちがからだづくりの目的・方法を意識化しやすい実践であること等の特徴が確認された。